

マレーシアにおける国家政策とマイノリティ

——マラッカタウンポルトガル居住区の事例から

城田典子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 前期課程2年

1. はじめに

本調査の対象となるポルトガル系マレーシア人は、そのほとんどがマラッカのポルトガル居住区、およびその近辺に居住している。ポルトガル系マレーシア人の起源は、1511年にマラッカに來襲したポルトガルの占領期に遡る。その時代に生まれた、ポルトガル人男性と現地のマレー人女性との混血の子孫として知られている。近年のポルトガル居住区における変化を背景としてマレーシア独立50周年を機にポルトガル居住区の社会組織は、ダンスグループを結成した。その活動を通して、現在「多民族国家」であるマレーシアにおいて、マイノリティであるポルトガル系マレーシア人が、国家体制の中でいかに自らの位置づけを試みているか、その現状の報告および考察をおこなう。

2. 調査期間

2007年7月25日から9月25日の2ヶ月間

3. 調査地

マレーシア、マラッカ州、ポルトガル居住区および周辺地域

4. 調査方法

現地調査は、聞き取りおよび参与観察によって行われた。調査言語は、ほとんどのポルトガル系の人びとにとって日常的に使用されている英語でおこなった。

滞在期間内である2007年8月31日は、マレーシア独立50周年記念日にあたる。独立記念日は、マレーシアで全ての「民族」が関わる数少ない祝祭日である。マレーシア国家主導で、マラッカでも盛大に祝われる。

5. 調査地概要

(1) ポルトガル系マレーシア人

現在、ポルトガル系マレーシア人の定義は、かつてマラッカを侵略したポルトガル人と原住民の混血であり、父系の子孫というものである。また、ユーラシア人としての定義の中にポルトガル系の人びとが含まれることがある。このユーラシア人とは、マレーシアユーラシアン組合 (Malaysian Eurasian Union) によりヨーロッパ人とアジア人系の父系の子とされる人々のことである。

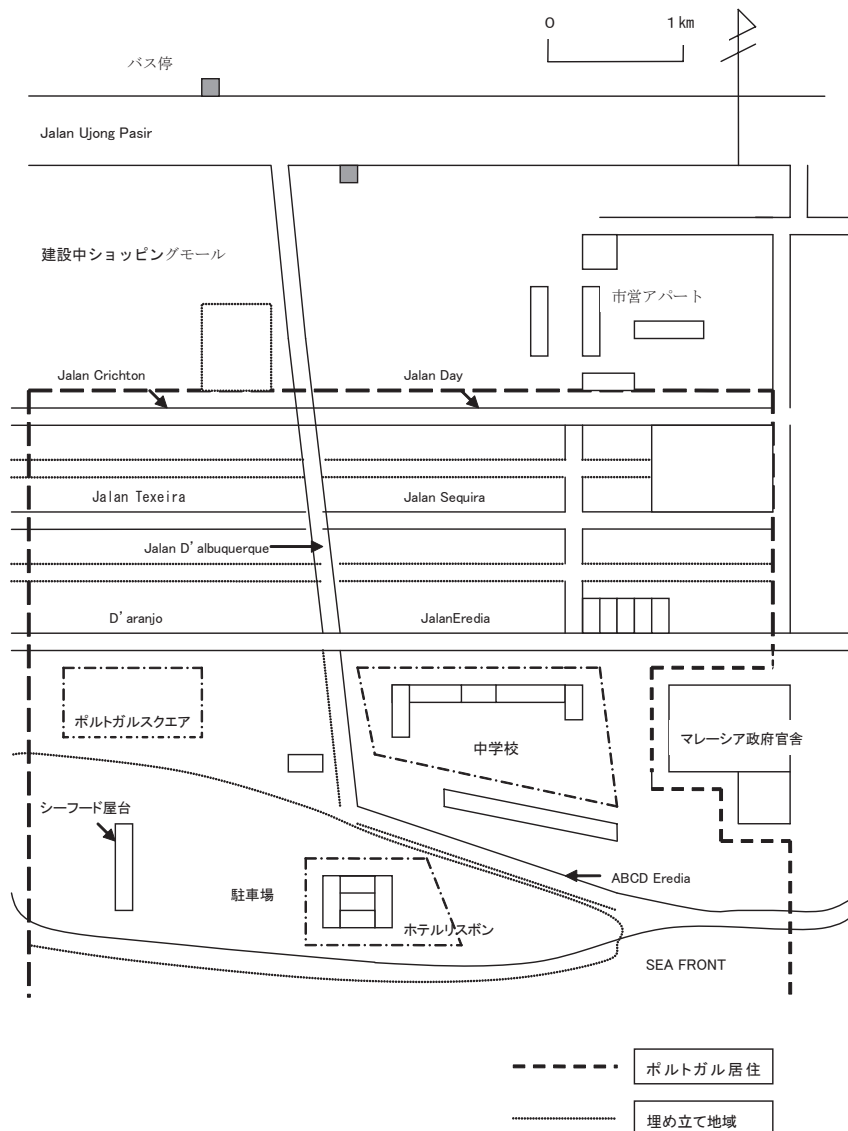
つまりユーラシア人には、ポルトガル人の子孫の他に、かつての占領していたオランダ人とイギリス人の混血の子孫も含まれる。これ以降、マレーシアの人口統計においても、このユーラシアンという分類が使用されるようになった。ユーラシア人とはポルトガル系、オランダ系の子孫を一括して示す時に使われる。その中でポルトガル系の人びとの数が圧倒的に多い¹⁾。また、筆者の聞き取りにおいて、ポルトガル系の人びとは、オランダ人の子孫の人のみをユーラシアンと認識している²⁾。

現在ポルトガル系の人びとは他の種族との混血がかなり進んでおり、他の民族と区別することは困難になりつつある。

ポルトガル系マレーシア人の人口は正確にはわからない。マレーシアおよびマラッカ州の人口統計でこれらの人びとは「その他」含まれている。「その他」には、少数先住民、タイ人も含まれているが、マラッカ州には、オランダスリやタイ人やその他のマイノリティはごく少数に限られているため、この実数はポルトガル系もしくはユーラシア人のおおよその人口として考えることができる。その人口は、2006年は4,900人となっている。

(2) ポルトガル居住区

ポルトガル居住区は、観光地として栄えるマラッカタウンの中心からバスにて約15分で、およそ6.5km



ポルトガル居住区地図

出所：報告者作成

の沿岸部に位置する。その形成過程は、イギリス政府占領下である1930年にカトリック教会の司祭である Rev. Am. Coroado と Rev. Pierre Fransis が貧しいポルトガル系の人びとのために提案し、イギリス駐在事務官 Reginald Chrichton との交渉のもと決められたと言われている。

ポルトガル居住区の区画された27エーカーの土地は、現在でも基本的にポルトガル系の人のみ家を持つことができると国により規定されている。ポルトガル居住区の人口は約2,200人で、家屋数は137ある。居住区の敷地はごく限られているため、親戚などの紹介以外で土地を入手することは困難である。そのため、ポルトガル居住区の付近にも多くのポルトガル系の人

びとが居住している。また、ポルトガル系のほとんどの人が、カトリックを信仰している。ポルトガル居住区内には教会がなく、ポルトガルスクエア内のコミュニティホールを代わりに使用している。[地図参照]

6. 調査報告

(1) 近年のポルトガル居住区の変化

マレーシアは、1991年の「ワワサン2020」³⁾により、多様な「民族」である国家と経済格差是正のためのマレー系優遇の両輪方針で進められることになった。この背景から、マラッカのポルトガル居住区でも政策実施の局面が見られ、変化が訪れていた。

マラッカ州政府は、1998年マラッカ州法令 No. 6でマラッカを「歴史的な都市」と宣言し、マラッカタウンにおいて歴史的に「重要」で保護すべき領域を明らかにし、各々の「民族文化」を認定した。ポルトガル居住区もその中に入っており、政府によってポルトガル居住区は、新たな視点でマラッカに重要な役割を課せられることになった。

ポルトガル居住区には、政府出資のもと、1999年から沿岸部の埋め立てが着工され、2006年にはシーフード屋台ができ、翌年2007年には観光客向けのホテル「リスボン」が建設された。そして現在も「ポルトガル文化遺産」と名づけられたショッピングモールがポルトガル居住区付近に建設されている。

(2) ダンスグループ「トロッパー・ディザ・マリア」の結成

ポルトガル居住区の社会組織は、社会状況に応じてその性格や役割を変化させつつも、住民の社会生活の枠組みとしての地位を維持してきた。ポルトガル居住区にある2つ主な社会組織が、新たにダンスチームの活動を開始したのである。

2007年1月に、ポルトガル居住区の社会組織PKKPPM⁴⁾とJKK⁵⁾が主体となりダンスグループ「トロッパー・ディザ・マリア」を結成した。ポルトガル居住区においてダンスは、マレーシアの他の「民族」にはない独特なフォークダンス⁶⁾として知られている。

ダンスチームは、ポルトガル居住区およびその付近に住むポルトガル系の9歳から15歳の男女各7人で構成された。

社会組織の人びとは、長くダンスチームを続けさせるためにメンバーを子どもたち対象にしたと言う。PKKPPMメンバーの中から、ダンスの教師・音楽担当・統括役が決まった。ダンスのメンバー参加には、社会組織のメンバーが事前に家庭に訪問し親に依頼した。練習は基本的に週に1回1時間から2時間、公演前は週に2回行われた。子どもたちは練習のたびに1～4RMのJKKから報酬を得ることができる。

(3) 独立記念日とダンス公演の依頼

2007年の1月からダンスチーム「トロッパー・ディザ・マリア」の練習を開始し、6月のサンペトロ・フェスタで初の公演が行われた。そのダンスを見た、国内大手企業の広報担当者としてホテル「リスボン」⁷⁾の支配人が、ダンス公演の依頼を受けることになった。

8月30日の独立50周年の前日あたる日に、ポルトガル居住区のステージを中心にダンスとディナーショーが企画され、結成当初からそこで踊ることになっていた。そしてダンスグループは、ホテル「リスボン」でも踊ることになったのである。

独立記念日までの社会組織の人びとと当日のダンスチームの公演の様子を見ていく。

独立記念日のために、社会組織の人びとは、様々な準備をし、その日を迎えた。独立記念日は、祝日であるため、前夜はあちこちでカウントダウンが行われる。

7月29日にはマラッカタウンで開会式が行われ、マレーシア国旗の柄のTシャツを着た中学生が、詰めかけていた。これを機にマレーシア全土のいたるところでマレーシアの国旗を目にするようになった。

ポルトガル居住区の社会組織の人びとは、8月15日の午前中にマラッカ州政府から受けた資金でマレーシアの国旗を買い、居住区に飾り付ける。午後には、州政府の大臣らがマラッカ州の各地を訪れマレーシアの国旗を立てる儀式があり、ポルトガル居住区にも訪れた。首長が政府から連絡を受け、ポルトガル居住区では、ダンス衣装を来た子どもたち2名が出迎えることになった。

一方で、PKKPPMが主体となり、ダンスとディナーショーについての計画が、会議によって着々と決められていった。まず初めに予算が決まった。ポルトガル居住区でチケットは、居住区の人には10RMで、それ以外の人には20RMで購入できるようにした。当日までに、500枚のチケット全てが完売した。

ホテル「リスボン」では、ダンス公演にむけての打ち合わせがG氏と支配人に間で行われた。時間の調整、ダンスの構成順、子どもたちの待機場所、賃金の交渉が数回にわたって行われた。

当日は、午後からステージの周りに客席が配置され、中華レストランが裏手では準備されていた。ダンスグループの公演にむけて、ダンスチームの統括役のメンバーが、再度ホテルおよびステージにて打ち合わせを行った。そして、20時30分に、ポルトガル居住区のディナーショーが開始した。まず初めに司会が、首長のスピーチを促した。首長は、前日に起きた漁師の船が一艘行方不明になったことを心配しつつも、今日の日をみんなで楽しんでほしい、と短いコメントを送った。その頃、ダンスグループの子どもたちは、ホテル「リスボン」にて観光客の前でダンスが行われた。野外ステージでは、フィリピンの歌手が歌と踊り



マラッカタウンにおける独立記念日の様子

を披露していた。その次に地域の小学生が仮装し音楽に合わせて踊っていた。そしてホテルでの公演を一次終わらせた「トロッパー・ディザ・マリア」は、野外ステージの裏手に待機し、クライマックスに登場した。野外ステージでは、観客を巻き込んで、みんなで踊った。これで、ダンスチームの子どもたちは、一時休憩となり、ホテルにてお客の後に、パーティ用の立食を楽しんだ。ホテルでは、終演の22時に再び踊り、今日の公演をすべて終えることになった。野外ステージでの歌手のステージは22時30分ころには終演になった。そして、ステージの付近に集合した人びとは、マレーシア国家「Negeraku (My county)」を歌い、31日になるカウントダウンを行った。31日は迎えた時に花火が鳴らされ、国旗をもってバイクで走行するものも見られ、ポルトガル居住区の野外ステージを中心に活気にあふれたかたちでポルトガル居住区の独立記念日は迎えられたのであった。

(4) 独立記念日後の「トロッパー・ディザ・マリア」

i) 運営

2007年から社会組織はダンスチームを運営しているが、すでに社会組織内の問題が生じている。ダンス教師が、コスチュームを組織に返還しないことや、組織を通さずに企業からダンス公演の依頼を受け資金を得ようとする問題が生じた。しかし組織は、メンバー男女各7人にコスチュームを新調した。さらにスタジオを貸し切ってダンスの曲のCDを作成するなどかなり力を注いできた。この資金について、JKK, PKKPPMの内部からは、すでに批判があった。そして、今後、ダンスメンバーの子どもたちに練習時に支払いをなくす意見が押されているが、反対意見もある。

ii) 役割：ホテル「リスボン」への参入



ポルトガル居住区野外ステージでのダンス風景

ダンスチーム「トロッパー・ディザ・マリア」は、ホテル「リスボン」とポルトガル居住区の人びととの唯一の繋がりになった。社会組織の運営するダンスグループが公演を行うことで、ポルトガル居住区の「文化」を対外的に見せる機会を得たのである。また政府の「開発」で住民とは離れたところで使われる「ポルトガル」をポルトガル系の人びとに引きつける要素をもたらしたのである。

ホテルで公演することで、ホテル側とポルトガル居住区の社会組織の人びとの関係に変化が見られた。ホテルでの公演に向けて、社会組織のメンバーであるG氏が打ち合わせと公演料の交渉を行うようになったこと、またホテルでの公演が終わった後、子どもたちとともにG氏も立食に参加しマネージャーとの談話が行われるようになったことがあげることができる。ポルトガル居住区の社会組織の人びとは、ダンスチームを媒介にして政府の建てたホテルの人びととの交流の機会を初めて得ることになったのである。

一方ホテル「リスボン」は、今後ポルトガル居住区という立地条件を活用し宣伝活動を行っていく方針にある⁸⁾。ホテル側は、地域住民からの反感や住民との乖離があると経営に支障をきたす恐れがある。地域と密着とまではいかないとしても、地域に溶け込むことかつ宣伝に活用できる方法としてダンスチームの当用は最適であったと考えられる。

iii) 課題

「トロッパー・ディザ・マリア」の公演は実質まだ数回しか行っていない。彼らのダンスは、未だ不十分で、フォーメーションを間違える子や、衣装のスカートやタイを落とす子もいた。また、野外フィールドに曲のはいったCDを置いてきてしまい、ホテルで踊るはずの演目を観客の前に出てから変更することになった。

しかし、結成されたばかりのダンスチームであるが、ポルトガル居住区の人びとには練習する姿からも十分に認知されてきた。それに伴ってチームに参加を名乗りでる子が増え、練習を怠るメンバーとの入れ替えを行うなど、現在G氏を主導にチームの質の向上を図っていくよう熱心に指導している。

(5) 独立記念日の役割

国をあげての独立記念日には、マラッカ州の大臣の訪問またはマラッカタウンで開催したセレモニーの参加を通じて、国家はマレーシア国民であることを意識させる。

一方、社会組織が開催したポルトガル居住区の催しを通して、ポルトガル居住区住民同士の結びつきを強くするもくろみがある。ディナーショーのチケットは、ポルトガル系の住民に対して、安い価格にし、その部分は社会組織の財源で負担した。このことは、普段社会組織の人びとに寄せられる住民の不満を解消し、信頼を高めるためという。

7. 小 括

現在マレーシア国家の近代的な仕組みによって、地域住民の統合と再編のために、民族概念が規定されてきた。マレーシアは、1991年の「ワワサン2020」により、多様な「民族」である国家と経済格差是正のためのマレー系優遇の両輪方針で進められることになった。この背景から、マラッカのポルトガル居住区でも政策実施の局面が見られ、変化が訪れていた。マレーシアにおいてマイノリティであるポルトガル居住区の地域住民にとって、政府は埋め立て地の着工、シーフード屋台とホテル建設などの「開発」が行われたのである。「開発」は、政府との表面的な交渉は行われても、ほとんど有無を言わさぬかたちで介入してくる。政府とは決して対等な約束を結ぶことも、その約束が果たされることもほとんどない。ポルトガル居住区の住民は、政府の用意した枠に乗り入れなければならないのだ。

その一方で、そのような政府の策にポルトガル居住区の住民は地域の固有性・独自性を盛り込んでいくのである。ポルトガル居住区の地域住民にとって政府との窓口になっているのが、ポルトガル居住区社会組織JKKとPKKPPMである。地域住民から政府に対する不満、要求は、すべて社会組織の人びとに最初に寄せられる。

社会組織は、近年の変化に伴い、ダンスのチーム結成を行うことを決定した。彼らは、「ポルトガル」として対外的に示すことができる「文化」を保持しようとした。

ポルトガル居住区社会組織の人びとが、政策に連動し、そこに独自性を入れこみ、利用を試みた活動である。今年の独立記念日に政府が観光客向けに建てたホテル「リスボン」で踊ることになったことは、その一面であるように見える。国家政策の転換でポルトガル居住区は、新たな政府との関わり合いを模索しているのである。

しかし、この状況を巧みに利用する活力は、現在のポルトガル居住区には困難がともなうと言わざるを得ない。実質14名の子どものダンスチームを結成することが金銭的に、また社会組織の人びとの協力関係からやっとなことなのである。

地域固有の「文化」の在り方を対外的に示していくには、単に他地域と異なるものが存在するというだけでは十分ではなく、一定の人口規模、地理的条件、さらにマレーシア国民文化の中で占めるその文化地位といったいろいろな条件が絡んでくるのである。

注

- 1) ポルトガル居住区社会組織PKKの組織成員においては、19名中1名のみがユーラシアンである。また、Chanによるとセント・ピーター教会の信者の数からユーラシア人の9割りがポルトガル系の人びとであるとしている[Chan 1983: 30]。
- 2) ポルトガル系とオランダ系の人びとの境界はかなりあいまいである。オランダ系の人もかつての宗教プロテスタントではなく現在はカトリックになっている。
- 3) 1991年2月28日、マハティール首相が「マレーシア——その前途——」と題した文書を発表した。これはマハティールが発表した中でもっとも重要なものであると言える。「ワワサン2020 (2020年構想)」として、以後30年の国家運営を規定する基本方針となったからである。そして「ワワサン2020」は、マレーシアが第2期で強化した「マレー人優遇政策」から「マレーシア国民」という新たな枠組みの中で多様な民族の共存を目指した多文化主義的な要素を盛り込んだ民族政策に転換しつつあることを意味していた。
- 4) PKKPPM (Panel Ketua Kampung Perkampungan Portugis Melaka) (Portuguese settlement regedors panel malacca) この組織は1930年にポルトガル居住区が形成した直後にできた社会組織が、またポルトガル文化を維持普及することを目的としている。居住区の祭事の運営を中心活動している。またその他日常的に起こる住民の問題の相談役を行っている。メンバーは首長を含む19人から成っている。首長の推薦によりメンバーが決められる。首長は前首長が退任する際に、3人を推薦しその中から政府が選ぶというかたちをとっている。メンバーは全員ボランティアとしての活動で、定期的な報酬は受け取っておらず、組織自体の収入もサン・ペトロフェスタの時

に得るのみである。会議は随時ポルトガルスクエア横のホールで行われている。

5) JKK (Jawatankuasa Kemajuan Kampummg) (Village Development and Security Committee) この組織は、マラッカセントラルに25局ある開発行政機関の支部として、2003年に形成した。首長を含む12人のメンバーから成るが、メンバーはPKKとほぼ重なっている。活動内容は、ポルトガル系の人びとへの保障・援助の申請である。その他、ポルトガル居住区内の土地整備の申請を行っている。組織の収入源は、海岸沿い埋め立て地に造られた駐車場の料金から得ており、その他ポルトガル居住区内にあるレストラン4店舗から恒常的に得

ている。会議は月に1回のみで、メンバーには政府から報酬が支払われる。

6) Brany, NoelFelix, Jinkly Nona, TiaAnikaの主に4種類の曲がある。

7) 2007年6月に、海岸沿いの埋立地に州政府出資で建設された観光客向けのホテル。ホテルのオーナーはマレー人で、マネージャーは中国系の人である。ホテルの名前は政府によりつけられた。

8) 8月30日の公演以来、9月15日にも公演依頼があり、今後恒常化していくことが予想される。